

RPAで定型業務を自動化

佐竹製作所 受発注処理や情報共有で

(株)佐竹製作所(東京都千代田区、尾方謙一社長)は、社内業務の省力化を目的にRPA(ロボティック・プロセス・オートメーション)を構築し、2019年から本格運用。基幹システム「アラジンオフィス」と連携させることで、受発注処理や情報共有などの定型業務を自動化し、作業時間の大幅削減と精度向上を実現している。

同社は従来、生産管理システムを活用していたが、経年による処理速度の低下や業務内容の多様化に対応しきれなくなってきたことから、2010年に㈱アイルのねじ業向け基幹システム「アラジンオフィス」を導入。山形工場(西置賜郡、製造機能)や草加営業所(商社機能)、関連会社各社との間でデータ連携を進め

業務のデジタル化をさらに加速させるため、2019年に本社内にFA(ファクトリーオートメーション)事業部を新設して、RPAの自社構築を開始した。具体的な事例として、注文書FAXの自動入力(AI-OCR R+RPA)、受発注データの自動処理、発注書作成の自動化などがある。

る。

FA受注処理では、従来担当者が手作業で入力していた約1時間分の業務を夜間にRPAが自動実行し、翌朝には受注リストが完成。担当者は確認のみで業務を開始できるようになり、入力作業の負担を大幅に軽減した。

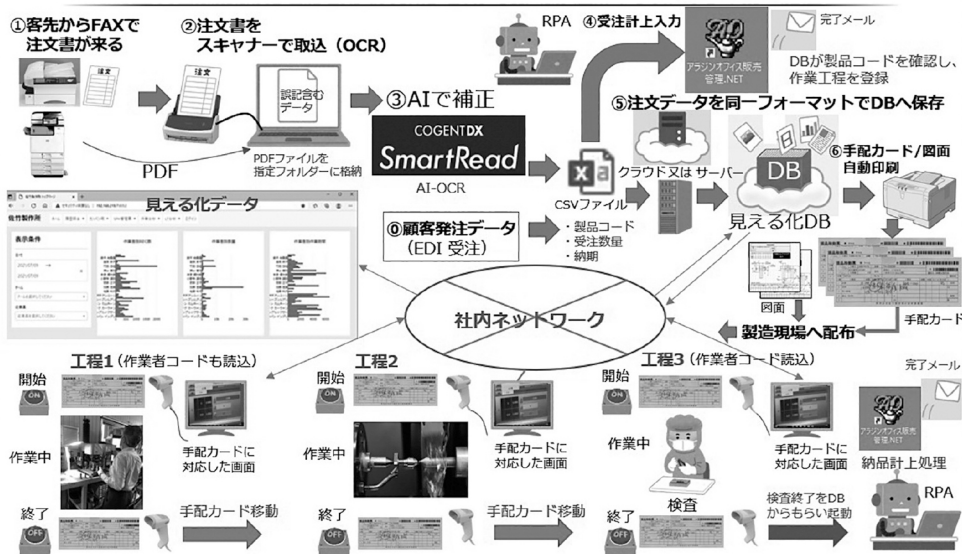
また、製造現場では作業進捗や稼働率の「見える化」を実現した。

「見える化」システムを構築。作業者の達成率、製品別の工程進捗、設備の稼働率をリアルタイムで表示し、生産性の分析やボトルネックの把握を容易にした。手配カードとバーコードを活用し、センサーなどの高価な装置を用いず安価に構築している点も特徴である。

構築・運用を通して「現場を理解する社員が自動化を設計できる体制づくり」にも取り組んでおり、各事業部から選抜した社員を対象に教育を実施。RPA構築スキルを持つ人材を育成している。現場主導による自動化が進むことで、さらなる業務効率化と改善サイクルの強化を図る考えだ。

同社では今後も、RPAと基幹システム、BIツール、倉庫情報などの連携を深め、「見える化」から「分析・活用」までを一体化した仕組みづくりを推進し、生産性向上と働きやすい職場環境の両立を目指している。

RPA+DB+AIの融合による見える化システム



挑め！省力化 特集